

女子大生のきものに関する規範意識

武庫川女大家政 ○藤原康晴 土山由美

目的 被服に関する規範には、要請される同調性の軽微なものから大きなものまで、さまざまなものがある。特にきものに関しては、きもの種類、着用の場面などについて多くの規範が存在する。ここでは女子大生がきものに対してどのような規範意識をもっているかをリターン・ポテンシャル・モデルを用いて分析した。また、きものに対して好意的な態度をもっている人と非好意的な態度をもっている人では規範意識がどのように異なるかについても検討した。

方法 家にいる場合から結婚式に出席する場合まで、インフォーマルからフォーマルまでの6場面(ケンダルの一致性の係数 $r = 0.989$)において、Ⅰ(振袖・黒留袖・色留袖)、Ⅱ(訪問着・付け下げ・色無地)、Ⅲ(紋付きの羽織)、Ⅳ(小紋)、Ⅴ(つむぎ)、Ⅵ(ウール)の6種のきものを着ていたと仮定して被験者の私的見解、世間の見解を測定した。また、きものに対する好意度はサーストンの等現間隔法によって測定した。

結果 振袖は結婚式の場面で最大リターンの点を、訪問着、付け下げ、色無地は同窓会、入学式、結婚式という場面で着用が是認されている。小紋は他のきものに比べて是認、否認の感情が弱い。どの種のきものについても世間の見解と私的見解は非常によく一致した。また、きものに対して好意的な態度をもっている人ほど、ある場面でどの種のきものを着るべきか、どの種のきものを着てはならないかに強い意識をもっていることがわかった。